OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	重畳形式と比況性連合構造
Author(s)	大河内, 康憲
Citation	大阪外国語大学学報. 1969, 21, p. 41-58
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/80350
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

重畳形式と比況性連合構造[1)]

大河内康憲

重畳形式和比況性的連合結構

本文試図就重畳形式和比況性的連合結構的基本同一性加以初歩的探討。我們在一般語法書里所看到的重畳形式，大多是従原詞的詞類観点分析的，就“吞吞吐吐，星星点点”這一類比較特殊的重畳詞談得還不够全面。本文包括這一類本無原詞的重畳形式，帰納起来漢語重畳形式的共同特点，并論它和比況性連合結構的同一性。

§0. 問題の範囲と用語

0.1：本稿は現代中国語（現代漢語）における重畳形式，およびこれと類似すると思われる特殊な連合構造，つまり“比況性連合構造”とよばれるものを論んじたものである。

漢語における重畳形式を論んじたものは，これまでに少くない[2)]。ただその大部分が品詞区分と関連した形態論的興味のもとで行なわれたものであって，動詞の重畳式ではどう，形容詞の重畳式ではどうといった立場が強い。必ずしも重畳式全般を通ずる“原理”といったものの抽出につながらない不満がある。本稿は形態論の立場を離れ，重畳式の巾を広くとって，漢語におけるひとつの特異な文法形式として設定されるべき重畳を考えたい。文法形式設定への試みである。“重畳式”とよばれるものを，“重畳形式”とよびかえたゆえんである。

重畳形式というものの枠を広げてゆくと，要するにそれは一種の“連合形式”であって，さらに単位の大きい“連合構造”というものにつながっている。ただ連合構造といっても，「日本和中国」といった一般の連合構造は問題にならないが，「説長道短」，「愁眉苦臉」といったものは，その性格が重畳形式にきわめて近い。「説説笑笑，普普通通」などと比較されてよい[3)]。つまり両者は漢語の発想のなかでは同一の根源より出た現象の差とも理解される面があり，ひとつの“文法形式”として設定されてよい性格がある。本稿は両者をそれぞれに論ずることによって，この問題を考えたい。

0.2：まず比況性連合構造[4)]とはどのようなものか。これまでほとんど論んじられていない（この呼び名すら安定したものではない）。ただ朱徳熙の次のようなことばを引用することができる[5)]。

聯合結構有両類。一類是一般的聯合結構，≪漢語≫課本（5・146）已経介紹過了。

一類是比況性的聯合結構，指的是下這面種格式：

醤呀醋的　　説呀笑的　　拼死拼活　　能写会算

東張張，西望望　　擱不下，放不下　　一把眼泪，一把鼻涕

と述べている[6]。

つまり比況性連合構造とは，その構成の上からは一般の連合構造とほぼ等しい。“二つ（以上）の語もしくは連語が連合関係でくみあわされているもの”である。しかしそのもたらす意味および文法機能の点からは，一般のものとかなりちがった性格のもので，一種のパラレリズムが特異な作用をもたらす“比況的”な連合構造である。「工人和農民」や「簡単而明了」は一般の連合構造の代表例であるが，外見上これと等しいが，その“並ぶ構造”のもたらす意味，機能はまったく異質なものとして，分けて考える必要がある「不知不覚」のようなものを指している。

0.3：本稿では“状況描写的”ということばをしばしば使う。“事の敍述”に対して“様態の描写”（単に形容詞文の意味ではない）といったもの，「山高」（山は高い）という単純な，まったく情意の入らない表現に対し，「山高高的」（山は高高としている）から想像されるような主観的，情意的とらえ方をいったものである。朱徳熙が「現代漢語形容詞研究」[7]でいう乙類形容詞はこの一種と考えてよい。詞のなかできわめて辞に近いもの，佐久間鼎氏のことばでいえば象徴語のなかできわめて態度語に近いものを指すため使ったものである。

§1. 重 畳 形 式

1.1：重畳形式にはどのようなものが存在するのか，またどのような問題が含まれるのかをあげようとすると次のように考えることができる。

重畳形式
- 1. 詞素の重畳したもの（重畳によって詞となるもの）
  - a．詞根の重畳の問題
  - b．詞尾の重畳の問題
- 2. 詞の重畳したもの……
  - a．もとの詞の品詞の問題
  - b．XXYYかXYXYかの型の問題
  - c．重畳によって生ずる機能および意味の問題
- 3. 構造の重畳したもの……
  - a．重畳の可能な構造の問題
  - b．重畳によって生ずる機能および意味の問題

1は語構成の問題である。これを漢語における構形法として考える立場があるが，語尾屈折をもたない漢語において，構形形式を設定するとすれば，その重要なひとつに組み入れねばならないものであろう[8]。しかしこれはひとつの見方の問題，morphology における整理の仕方というにすぎない。1のbは形容詞語尾の問題である。また2，3は syntax の問題である。とりわけ2は品詞論争や“漢語課本”の文法体系のなかで論んじられてきたものであり，重畳形式を説く多くの論文の扱うところである。1，2，3を本稿では同じレベルで扱う。もち論，陸宗達，俞敏ほか多くの人によって指摘されるように[9]，“level of representation”といったものを認めないわけではないが，すべて一律に“形式”であり，その重畳とみるのが本稿の趣意である。3は次のようなものを指す[10]。文法の問題としてそう多くあるわけではない。

1. 一个人一个人地走進来。

2. 一忽閃一忽閃的要下雨。

1.2：まず重畳形式を二分して論をすすめたい。つまり“状況描写性”のものとそうでないものである（前者をA群，後者をB群とする)。前者は“生生しい様態を想像させる”点で共通であり，しかも文法機能の点でも状語，述語としてはたらいている（原来の品詞にかかわりなく)。しかしB群は必ずしもそうでない。

A群

〔形容詞〕 3. 我們深深知道他有个老主意“自自然然種庄稼，和和平平搞生産”。

4. 那家伙直挺挺地躺在雪地上，白茫茫蓋了一層雪。

〔動詞〕 5. 他們嘻嘻哈哈地説説笑笑，打打閙閙，唱着自己編的山歌ル[11]。

〔名詞〕 6. 公路上雪水横流，到処是坑坑洼洼，汽車又是晃又是跳。

〔場所詞〕 7. 水利干部上上下下沿着水渠査看，蹲在渠辺久久思索。

〔数量詞〕 8. 現在不是都已経一座座地建設起来，一件件地制造出来了嗎？

〔数詞〕 9. 戦士們三三両両坐在樹下促膝交談。

B群

〔名詞〕10. 人人都知道，家家都搞生産。

〔量詞〕11. 十几張嘴張張都那麽厲害。

〔動詞〕12. 等他們来再商量商量。

A群はいずれも状況描写としての重畳であり，ある種の“生生しさ”を伝えている。これに反しB群にはその性格が弱い。すでに指摘されているとおり，名詞の重畳は「毎一」をあらわし，量詞の重畳もそれに近く，動詞の重畳は aspect をあらわすといったものである。

しかし，本来重畳形式というもののもたらす意味を，A群にひとつの典型として見出すことができると思う。漢語の副詞には重畳するものが少くない。「常常，剛剛，偏偏，単単，恰恰，整整」などをすぐにあげることができるし，重畳することを不可欠とするものもある。

足足，頻頻，略略，微微，漸漸，統統，通通，屡屡，匆匆，悄悄，徐徐，嘗嘗，往往，僅僅

連用修飾という位置は動作，状態のあり方を描写するところといえるが，そこにくるものには，重畳するものがきわめて多い。したがって逆に重畳形式というもののひとつの大きな役割は，状語として状況描写をすることにある，といってもよい，このことは状語になる一音節形容詞が，一部のものを除けば重畳形式でなければならないことを想起すれば十分である。重畳するなら，状況描写にふさわしくないと考えられるもの（場所詞，数詞）すら状語になるのである。B群にそういう性格がないわけではないが，より明確にみられるA群についてこの性格を考えていきたいと思う。

1.3：従来より重畳詞を本来の品詞から見る立場が支配的である。形容詞は重畳して程度の深いことをあらわし，動詞は重畳して短時相，試嘗式になるといったものである。しかしもとの詞の品詞を考えることは，重畳形式を考える上でそれほど重要な問題ではない。というのは，それら

の品詞に属するもののすべてが重畳するわけではないし[12]，また重畳によって生ずる意味や重畳型がつねに一定であるとはいえないからである。すでに指摘されているとおり，一部の二音節動詞にＸＸＹＹ重畳型がひろく存在するし，またＸＸＹＹ型になる形容詞は原詞の構成が連合式でなければならない点も，この問題を考えるにあたってきわめて示唆的である。

13. 寨子今年回来了一批高小和初中畢業生，回到家，商商量量，説是要給社里一点“見面礼”。

さらにまた一音節動詞においても次のような例をあげることができる。

14. 底下許多工人嚷嚷，説伯川応該叫他把奨金退出来。
15. 零件滾滾如流水。
16. 他念念不忘他的資産階級改良主義。
17. 他們踏上雨水淋淋的金属板，……

いずれも重畳する以前は動詞と考えられるが，ここに見る形は動詞とはいいがたく，一種の状態である[13]。16，17は「不忘」や「雨水」と結んだ固定格式のにおいがつよいが，ともに状況描写的であり，形容詞の重畳がもたらす意味に近いといえる。

名詞の場合においても同様のことがいえる。先にあげたＡ群６の「坑坑洼洼」は，一音節名詞の一部に限られるといういわゆる名詞の重畳とは別物であるし，そのことは次のような例にも見ることができる。

18. 看到他的枕旁放着一套毛沢東選集。書皮巻曲，里面画満了圏圏点点。
19. 全村八十七戸人家，散居在十五里長的溝溝嶺嶺上。
20. 他用一張刮臉刀片，把旧報紙的辺辺角角裁下来，釘成了学習本子。

これらの例はともに従来より論んじられた動詞や名詞の重畳では扱われないいわば例外である。しかしそれより，われわれはこれらの例のなかから，動詞や名詞といったきわめて状況描写にとぼしいことばが，それぞれある種の具体的状況を“生生しく”写しだしていることに注意しなければならない。頁いっぱいに打たれた“点”や“まる”，いくつも重なる“嶺”や“谷”を，われわれはこれらの例から容易に想像することができる。そしてそれを可能にしているのは重畳であるといってよい[14]。

1.4：現代の漢語書面語には，次にみるような重畳がきわめて多い[15]。

21. 他滔滔説下去。
22. 他這才依依不舎地匆匆辞別両个女工。
23. 有个赫赫有名的隊長洪鳳英。
24. 望着冉冉上升的五星紅旗，熱泪直流。
25. 他平時也諄諄教導学生，画馬要以真馬為師。
26. 当時的情景，歴歴在目。
27. 祖国各地青年紛紛組織了墾荒隊，来到這里。

28. 他唯唯听命，心中十分得意。

これらは口頭語ではほとんどあらわれず，書面語に限られる。しかし文言というには当らず，現在書面語でいずれも不可欠なことばである。ただなかば固定した格式であり，完全に自由な形式ではないため[16]，また従来の“重言”の系譜をひくものであるため，ほとんど論んじられることがなかった。しかし漢語における重畳形式のひとつの姿をこのなかにうかがうことができる。詩経，楚辞以来漢語には重言がきわめて多いが[17]，そのほとんどは状況語である。たとえば：

悶悶不語。駸駸日上。孜孜不倦。惴惴不安。

またこれらは，すぐ述語に転ずる性格がある。

車轔轔，馬蕭蕭，行人弓箭各在腰。（杜甫兵車行）

孔子於鄉党，恂恂如也，似不能言者。其在宗廟朝廷，便便言，唯謹爾。朝，与下大夫言，侃侃如也，与上大夫言，闇闇如也。君在，踧踖如也，与与如也。（論語鄉党篇） 文中「便便」は連用修飾であるが，「恂恂如，侃侃如，闇闇如，与与如」などは述語である。つまりここに見られる重ね形はすべて状語か述語であって，状況描写性のことばとして使われている[18]。

もっとも原来漢語にあっては状語と述語の区分はきわめてあやしい。複雑謂語といわれるものの第一述部は，述部というより連用修飾という方が当っているものが少くない。

29. 他笑着説：……

30. 有些地還没有犁，緑肥密密麻麻堆在田埂上。

「笑着」は「着」のつくことにひとつの秘密があるが，「他笑笑説」でも同様であって，“笑いながら”であり，「説」のあり方についての説明である。第一述部という名称は，学校文法としての立場から，この形式に与えたひとつの説明にすぎない。30の「密密麻麻」は人によってこの後に逗号を入れる。入れなくても読んだとき，ここで息を入れる。逗号が入っていると，文法説明としては一種の複雑謂語で，「密密麻麻」は述部となるが，しかし中国人の発想としては状語，述語の区別がない。このことは介詞構造状語において，介詞が動詞より転成したものであることを考え合わせれば，思いなかばにすぎる。ともあれ，状語というものの漢語における実体は必ずしも明らかでないが，状況描写性のことばは状語用法，述語用法相互に相通ずるわけであって，重言におけるこの種の例はきわめて多い[19]。

秋風颯颯。白草粛粛。気息奄奄。

したがって，重言の系譜をひく現代書面語の「紛紛，滔滔」のたぐいに，述語用法が少くないのも当然のことである。

31. 這様一来，群衆議論紛紛，有的説：……

32. 他臉色清癯，可是両眼炯炯有神。

1.5： 以上のような事実は，現在みる重畳詞が必ずしも原詞があってその重畳したもの，つまり原詞の存在を前提としたものばかりでない点とも関連する。状況描写にふさわしい詞素，または詞であれば，それを状況描写にふさわしい順序（ＸＸＹＹなど）に並べるだけで成立するとい

った事情がある。原詞をもたないまたは原詞の重畳とは単純に考えにくい四音節重畳詞は多い。

星星点点，零零散散，零零落落，源源本本，形形色色，山山嶺嶺，口口声声，男男女女，祖祖輩輩，祖祖孫孫，鬼鬼怪怪，家家戸戸，世世代代，轟轟烈烈，分分秒秒，時時刻刻，双双対対，影影綽綽，密密麻麻，層層畳畳，熙熙攘攘，空空洞洞，断断続続，心心念念，花花緑緑，紅紅緑緑，説説笑笑，吞吞吐吐，跑跑顚顚，跑跑跳跳，哭哭講講，拾拾掇掇，縫縫洗洗，進進出出，出出入入，罵罵咧咧，修修補補，瘋瘋癲癲，閃閃爍爍，気気悩悩，長長短短，大大小小

もち論これらは自由は作れるものではない。歴史的なつみ重ねを背負っているなかば固定した格式である。前後の成分を入れかえることも許されない[20]。しかしなお“生造”なものがあるのは事実で，規範的でないにしてもそれが許される素地を漢語がもつことが問題である。「分分秒秒」などであるが，次の例もそうである。

33. 只是把岩石打打鍛鍛，砌砌墾墾，一百多処溝壑当冲便从容跨渡了。

1.6：このような形容詞でないＸＸＹＹが，それではどのような条件のもとで成立するのか。結果のみ示すと，次のような点を指摘することができる。

第一に，重言の特殊なものの継承をのぞけば，前後の成分が同種のもの，つまり性格のかわらないものとみられていることが必要である。「星星点点」では「星」，「点」，ともに小さいものであり，そのＸＸＹＹ形式は“ちっぽけな”という状況描写語になる。「鬼鬼怪怪，源源本本」すべてこの調子である。

第二に，全く逆の概念，反義語を並べるものがある。「男男女女，吞吞吐吐，進進出出，遠遠近近」などである。しかしこれも“同種のもの，性格のかわらないもの”ということの逆用であって，“その端的に相反するものも変わりなく，そのいずれにも通じて”という意味をもたらしている。一種の週遍性あるいは“汎説”というべきものである。

大大小小，足有二三百顆，装満了四簍子。

この「大大小小」は名詞の重畳とほぼ同じであるとする説がある[21]。しかし「二三百個」のあり方を描くものであって，「大きいものも小さいものもひっくるめて」という描写的汎説になっていることは否定できない。

第三に，状況語というものの性格にもとづくが，場所，時間にかかわるものが多い。「日日夜夜，朝朝夕夕，年年月月，年年歳歳，早早晩晩」などである。このことは方位詞が重畳することと関連する。「前前后后，里里外外，上上下下」などである。反義詞の対挙であるが，意味するところは「到処」である点において第二にのべたところとひとしい。

第四に，もとの詞または詞素が動作を意味する場合，その動作がきわめて外見上明らかな，あるいは知覚しうる一種の“様態”をもっていることである。つまり比擬性のものである。「揺揺擺擺，哆哆嗦嗦，唏唏噓噓，跟跟蹌蹌，結結巴巴」のたぐいである。もち論これらの例にもれる動詞重畳もあるが，発生的にはこの種のものを考えるべきである。

第五に，もとの詞や詞素が動作を意味する場合，それらの動作は必ずしも具体的事実として存

在するとは限らない。「吞吞吐吐」は現実に「吞，吐」することではない。「三个人説説笑笑，把愁悶的情緒赶跑」の「説説笑笑」は“にぎやかにすごす”ことを意味するにすぎない。

34. 他躲躲閃閃，顕得見外，還怪別扭的。

この文の重畳部分を「躲閃」におきかえるなら，“かれ”は明らかに事実として“よけた”ことになる。既成の事実として読まねばならないであろう。しかしここに見る形は，かれの近頃の“そぶり”でしかない。本質的に“状態”と“動作”のちがいとはこのような性格をもつようであるが，要するに一種の抽象としてのべられている[22]。

1.7：上述のことは，数量構造（数詞＋名量詞など）の重畳においてもほぼ同じことが見られる。数量構造は時に後に名詞をともなって重畳するが，状況描写性のことばとして，状語にも述語にも用いられる。状語として：

35. 他把剛買来的東西一様一様擺開給我看。

36. 没用一根木頭，硬是靠双手，一塊石頭一塊石頭地砌起了這座工程浩大的石橋。

述語としては相声の次の一部をひくことができる。

37. 帽子一摞一摞的，扁担一捆一捆的，盆ル一套一套的，盤子一堆一堆的，喜鵲一群一群的。

“帽子も，にない棒も，盆も……みんなそれこそたくさんある”ということであろう。

38. 他突出政治的故事一串串，説不完。

39. 装料時要鋪匀，不要一堆一堆，象个小山。

数詞がおちて量詞の重畳のようになることも少くない[23]。

40. 放眼望去，壠頭条条，象是梳過的一様。

41. 春風陣陣，伝送着告別的話音。

これらについても“逐指”という考えは一般にある。しかしこの「条条，陣陣」は，そのひとつひとつを順次カバーすると同時に，まのあたりに見るもの，感んずるものを，そのままに写しているといって大きな誤りはないであろう。

1.8：二音節形容詞のＸＸＹＹ型重畳は，その語構成が連合式のものに限られる[24]。他の場合は重畳しないか，また重畳してもＸＹＸＹ型（血紅血紅）となる。したがって上にのべた重畳によってもたらされるその他の状況描写語においても，このことは同様である。「字字句句，山山嶺嶺」がＸＸＹＹ型であるのは「字，句」，「山，嶺」の間に連合関係を認める意識が強いからである。連合関係を認めえないものでは次のようになる。いずれも“生造”な，いわば臨時的重畳であるが：

42. 這个指揮部真帯勁，可是別臨時臨時的了，把這組織形式固定下来吧。

43. 她問个遍，連他吃奶時的事，也都逐様逐様記在本子上。

44. 看我這个老糊塗，尽講尽講的没个完。

これらがＸＹＸＹ型となるのはその間に連合関係を認めえないからである。中国人の言語意識の

なかには，“生造”であっても，これらをＸＹＸＹ型で重畳すれば，なんとなく“通る”という認識をもっているし，また聞く方も“順”ではないにしても，それを十分受け入れる潜在意識としての“文法”をもっているといえる。

つまりＸＸＹＹ型になるか，ＸＹＸＹ型になるかは，Ｘ，Ｙという成分の間にどのような関係を話手が暗に認めているかという問題である。重畳型のちがいが，つねに異った意味をもたらすというわけではない。いわれるところの動詞型，形容詞型重畳の意味のちがいは，一部動詞の重畳というものがもたらす意味のちがいであり，重畳型一般の問題ではない。ＸＸＹＹ型であろうと，ＸＹＸＹ型であろうと，重畳というものは本来“生生しい，状況描写性を生みだすわけであって，名詞と考える「臨時」すら，重畳によって“臨時”的に述部としてはたらいて，受け入れられる要素がある[25]。

だからこそわれわれは次のような例にも，とまどうことがないわけであろう。重畳のさらに重畳したものとして，その“ありさま”を容易に脳裡に思いうかべることができる。

45. 工人們就這様停停干干，干干停停，好象是在和雨捉迷蔵。

46. 他們停停走走，走走停停，好容易到了“共青”炉前。

これらでＸ，Ｙ要素が前句と後句で逆になる点は，次にのべる比況性連合構造の性格につながっているが，漢語の発想として，けっして奇異なものではない。

要するに以上のべたことから，重畳は原来の詞を中心としてのみ考えられるべきものではなく，重畳というものの本質には“逐指”や aspect といったものとは別に，今ひとつの共通の意味，つまり“容易に人にその様態を想像させる”ものをもっているといってよい。したがってそれは主として状語機能，次いで述語機能をもつことばとしてあらわれるという結果をもたらすわけでもある。これは後に3.2でのべるように必ずしも漢語だけのものではない。しかしわずかに“long long ago”などに見る印欧語での“程度の深さ”といったものとは全く異ったものであり，同日の談ではない。重ね型というものが漢語でになうこの共通の性格（文法的意味）は，それなりにひとつの文法形式として考えておくことが必要なのではなかろうか。この問題はただにこれだけでなく，次にのべる比況性連合構造とよばれるものにもつながっていくからである。重畳型の変種として比況性連合構造が考えられる（あるいはその逆かもしれない）以上，これはやはりひとつの文法形式だとわたしは考える。

もっともレトリックとしての重ね型のあることも完全に否定するわけではないが，（たとえば王希傑「魯迅作品中的一種修辞手法——反複」中国語文 '60, 11, 390頁など）。これはまた別の問題である。

1.9：「逐様逐様，尽講尽講」のＸＹＸＹ型重畳は比況性連合構造にそのまま つながっていく性格をもつ。というのはＸかＹかの一部を類義語で置きかえるなら，そのまま「鬼頭鬼脳，慢声慢気，冷声冷調，不知不覚，大喊大叫」などになるからである。これらはＸＹＸＹ型重畳を根底においてひきついでいる。これらの四字句はいわゆる“前后両截”であり，前後相呼応しているが，その間にはパラレルの関係が保たれている。ただ第１字目と第２字目との関係，つまりＸとＹの関係が偏正なのである。おそらくここでも連合であるなら「鬼鬼怪怪」としかなりえないで

あろうが，1.8でのべたごとく偏正であることはＸＹＸＹ型をもたらし，後のＹを類義語にさしかえることを許す。その結果は比況性連合構造とよばれるものを生みだすことになる。つまりＸとＹの間に連合関係が存在するなら1.5であげたような重畳形式に発展し，偏正や主述，動賓であるなら比況性連合構造に発展することになる。同じものがその二要素間の関係によって形をかえてあらわれているにすぎない。もっとも比況性連合構造はさらに独自のものに発展していくわけで，「能説会道」のようにその型の上では離れていくが，前後二つの部分よりなるし，その間のパラレリズムはくずれることがない。またそのもたらす意味は，われわれが重畳形式にみてきたものと本質的にかわるものではないのであって，同じ延長線上のものとして捉えることができる。

§2. 比況性連合構造

2.1：比況性連合構造としてどのようなものが存在するのか。いくつかの例をあげると次のようなものである：

Ａ．軽手軽脚　毛手毛脚　好心好意　各種各様　躡手躡脚　成千成万

Ｂ．閒咸閒淡　吃好吃歹　走来走去　有声有色　没頭没脳

Ｃ．能説会道　爬山越嶺　横冲直撞　花言巧語　説長道短　胡思乱想

Ｄ．天不怕，地不怕　一会怕這，一会怕那　東撿撿這，西摸摸那　思思前，想想后

ＡＢはＸかＹのいずれか一方が同一の詞または詞素であるもの。大部分はＸの方が同じである。ＣはＸ，Ｙともに異るが，少くともいずれか一方が類義語で，他方は類義か反義かのいずれかであるもの。Ｅは比較的長いもので，自由な結合をしているものである。しかしここでも類義語か反義語を用いるという原則はくずれない。

これらを通じてみると，これはさきに1.6で臨時的ＸＸＹＹ重畳が成立する要件としてのべたものと全く変るものではない。一般に前２字と後２字は同じものと考えられているわけで，ことばをかえているものは，レトリックとしての効果をねらっているにすぎない。また反義語も少くないが，これにしても“そのいずれをも通じて”という意味がきわめて濃い。「説長道短」は日本語になおせば“あれこれいう”となろうが，“あれ”も“これ”も通じたものとして「長，短」が存在するわけで，一種の“汎説”である。

したがってこれらは文法機能の点からいっても，ＸＸＹＹ型の臨時重畳形式とひとしく，状語，述語機能に主たる役割をみることができる（もち論，定語にも補語にもなりうるが）。ただこれらの多くは，中に動詞性のものを含むため当然と見られるものが多いが，名詞性だけのものにおいてもこの点はかわらない。たとえば状語では：

47. 特務又死皮頼臉地找上了張同志。

48. 他鬼頭鬼脳地閃在頭子的身后。

49. 他冷声冷調地説：……

50. 護士軽手軽脚地走過去，替病人蓋好被子。

述語用法はさすがに少いが：

51. 遇到困難，也不能愁眉苦臉。

52. 這些人貧嘴薄舌。

53. 広聚見他土眉土眼[26]

さらに朱徳熙のあげる例は：

跟我你呀我的説話也可以。（状語）

你再別你呀我的了。（述語）

たとえ名詞的であっても，構造としての機能はかわってしまうのである。それはちょうど重畳形式が，重畳することによって本来の機能をかえるのと同様である。形容詞が重畳することによって状語機能を得るのとかわらない。

2.2：比況性連合構造が一般にどのような特徴をもつのか。朱徳熙は一般の連合構造とくらべて次の4点をあげている[27]

1. 各構成項の意味は必ずしも“実指的”ではない。また各構成項の意味の総和は構造全体の意味にならない。たとえば「東望望，西望望」は「東，西，張，望」にかかわりなく，「到処看」である。
2. 一般の連合構造は2項以上であってよいが，比況性連合構造は必ず2項である。
3. 構成の自由なものもあるが，多くは半固定結合である。
4. 文法機能は一般の連合構造では構成項の機能と一致するが，比況性連合構造では異ったものとなる。

この4点は実は比況性連合構造を立てねばならない理由である。これらの点をいま少し敷えんすると，まず比況性連合構造において，その意味するところは，つねに一種の“汎説”である。

54. 婆子屁滾尿流的吃了両道茶。

55. 他好吃懶做，嘴大舌長。

56. 東家説長，西家道短。

「屁滾尿流」は“あわてふためいて坐って”しまったのであり「屁」や「尿」とは関係をもたないし，「嘴大舌長」は“口や舌が大きかったり，長かったり”するわけではない。同様に58は“近所があれこれいう”という一般的命題として提起されている。具体的事実の表明ではない。しかしまたこの具体的事実でないということが，実は“様態”の表現につながるわけであって，さきに1.6の終りで少しふれたとおり，動作と状態というものの本質的性格につながっている。状態というものの恒常性，少くとも比較的長い時間のもとで考えられるものと，時間と密接に結んでいる具体的動作とのちがいである。「説説笑笑」が“話し，笑う”具体的動作をはなれ“汎説”になっていることが，“にぎやかな談笑のさま”に通ずるものをもたらしている。具体的動作をとって，われわれは“汎説”というものを考えることができない。

ともあれ，この“汎説”という性格は，さらにその延長として，一般的命題ということにつながる。そして一般的命題ということを考えると，われわれは俗諺にきわめて比況性連合構造が多い（2.1のDにあげたものにすでにそういう性格がある）ことを特に注意しなければならない。

57. 人不知，鬼不覚。
58. 靠山吃山，靠海吃海。
59. 気気悩悩生了病，嘻嘻哈哈活了命。
60. 做做力出，縮縮病出。
61. 単絲不成線，孤樹不成林。

もち論，諺というものには韻律の関係[28]，レトリックの要素が入ってくるが，同時にこれらには比況性連合構造がはたらいていることを見落すわけにはいかない。われわれが次の例の引用部に諺のようなものを感んずるのはこの事情にもとづいているとみられる。

62. 他検査机器特別細心的，常説“細心一早，定心一天！”。

また比況性連合結構というものをどの程度までと考えるかは問題があるが，一般に固定格式といえるものが多い。しかしこれは，比況性連合構造そのものに格式があるというより，比況性連合構造を簡単に作る便宜が用意されていると理解すべきである。次の定型を利用したものはきわめて多いし，またこれらを利用すれば，かなり“自由”に作りうる余地がある[29]。

千……万……（千辛万苦，千呼万喚）。　連……帯……（連人帯馬，連皮帯骨）。
不……不……（不慌不忙，不理不睬）。　半……不……（半死不活，半新不旧）。
没……没……（没頭没脳，没老没少）。　胡……乱……（胡思乱想，胡言乱語）。
東……西……（東倒西歪，東跑西転）。　……来……去。　明……暗……。　精……細……。　……這……那。　……前……后。　一……一……。

われわれはこれらの表現力を単に成語や諺語とのみ理解して終るべきではない。これらに“生生しい”表現力を与えている一端の理由が特殊な連合構造にあることを見なければならない。語構成と syntax の一元論が，漢語において，きわめて魅力的な記述となるゆえんである。成語の形式については：

成語多数是四个字的。最普通的格式是上下両截用対対子的辨法連在一起。例如“遠走高飛”……[30]

といった説明が一般に与えられる。しかし“上下両截”であり“対対子”であることは修辞の結果ではない。漢語を支配する基本的原理にもとづいている。したがって“生造成語”というものはしばしば「言欲談笑」のようになる。比況性連合構造に根ざす限りなんとなく“通ずる”のである。しかしそうはいっても，もち論，成語における言語単位としての単一性，“完整性”を否定するものではない[31]。

2.3：比況性連合構造のわくを広げて考えると，われわれは“対句”というものに行きあたらざるをえない。わたしは対句というものをどのように考えるべきか考えをもたないが，重畳形式を通

して，比況性連合構造にみてきた原理が，なお対句にはたらいていることを感じないではおれない。従来多くは修辞の問題としてのみ扱われてきたように思うが，漢語にとって，それは修辞以前のものである。漢語というものに根ざす文法形式として，一種のパラレリズムがある。それが発展，加工され，その状況描写性，“生生しい”表現力のとぎすまされたものが対句型式だと思うのである。重畳形式は“人民”の“活的語言”に多いといわれる。詩経に重言が多いということもこれと関係をもつであろう。

このことは詩や歌謡で対句が定形になってい用いられることと無関係ではない。重畳形式，対句がともにそのもたらす意味において類似する点があるということであろう（もち論それだけで詩の説明がつくとは思わないが)。漢語という言語に，わたしは「事実の敍述」それだけに終るものと，「話手の情意を強く含む表現力の豊かなもの」との対立を基本的に設定しなければならないと考えるが（一種のムード)，重畳や比況性の連合はその後者として，接辞によってはたされる場合と同様に，構造のレベルでそれがもたらされていると考えるのである。そう考えることによってのみ次のような例を説明することができると思う。

63. 你怎麽半夜深更唉声嘆気的。

「排坐」と「排排坐」は等価の表現とは考えられないが，次のような例も多い。

64. 有風有雨，船上的人，一律不准回家睡覚。

なぜ「有風有雨」になるのか。「有風雨」であってはいけないのかということは問題である。“事実の敍述”としての「有風雨」と“情意”を加えての「有風有雨」とのちがいを見ないわけにはいかない。漢語でこの二種の表現の対立というものはまことに基本的なものであると思う。

漢語は連詞の発達しなかった言語である。しかしこのことは上述のことと無関係ではない。“並ぶ”ということが，“語序”に文法を見出す漢語にとっていかに大きな意味をもつかということは想像がつくが，とりわけ構造単位の並置は，それがある種の文法的意味につながる以上，単なる apposition ではないのである。

§3. ま と め

3.1：朱自清の「海闊天空与古今中外」という随筆の冒頭に次のような一節がある：

有一天，我和一位新同事閑談。我偶然問道“你第一次上課，講些什麽？”他笑着答我“我古今中外了一点鐘”他這様説明事実，且示謙遜之意。我曽来不想到“古今中外”一个兼詞以作動詞用，並且可以加上“了”字表示時間的過去，驟然听了，很覚新鮮，正如吃剛上市的広東蚕豆。

「古今中外」という名詞性のことばが述語になり，「了」をともなっていることに驚き，作家のするどい感覚でその新鮮さをたたえている。しかし問題の鍵は，「古今」と「中外」が“並ぶ構造”としてつながっていることにある。「古今」や「中外」の一方だけならとても成立するものではない。つまりいわゆる“対対子”がひとつの文法形式としてはたらいていることを見なけれ

ばならない[32]。

漢語の文法には藤堂博士によって提起されたいわゆる“構造論”というものがある。morphology, syntax 一元論で簡明である。そのなかに“並ぶ構造”というものがある。しかしこの“並ぶ構造”は他の構造に比し，そのもたらす意味が必ずしも明確でない。この構造が一義的につながる文法的意味についての共通の明確な規定がない。たとえば“向う構造”と“起る構造”との差は，主としてそのもたらす意味の差によって区分されており，明確であるが，“並ぶ構造”は同種の語，形式の並置という面からの分類であり，かなりいろんな内容のものを含む。もっともこれは従来から中国語文法一般のものであり，黎錦熙以来英文法の apposition のようなもの，ないしは「日本跟中国」のようなものに syntax で同工異曲の扱いをしてきたわけである。

しかし漢語における“並ぶ構造”というものを，この比況性連合構造および重畳形式（“重なる構造”とよぶべきか）のなかに見てよいのではなかろうか。もち論，一般の連合構造，動詞の aspect を示す重畳式の存在を見落すわけではないが，漢語における特異な文法形式として，これらのものを一応明確に捉えておくことは，漢語の発想に迫る重要な手がかりだと考えるからである。

従来比況性連合構造の多くはレトリックとして扱われてきた。「句子的効果」として「対偶，排比」などの名称で，修辞を説く多くのものに述べられている[33]。しかしわたしはこれらを修辞の問題と考えない方がよいと思う。明らかにこのような構造につながる文法的意味をもつからである。

3.2：重なる構造が一種の“汎説”になり，連用修飾になるのは必ずしも漢語だけではないようである。東洋のことばには少くないらしい。身近な日本語をひくと[34]：

ますます　　ゆくゆく　　つねづね　　つぎつぎ　　はふはふ　　なかなか

だんだん　　おそるおそる　　なくなく　　かえすがえす　　おずおず

多くは連用修飾語である[35]。また意味に大きなちがいはないが，重ねることによって連用修飾機能を得るものも少くない：

先手先手と攻めあげる。

ちょうちんを消せと言い言い飛車をなり。

三上章氏は「日本語には畳むことによって単語や単位をシンタクチカルにする機能があることを見落してはならない。つまり“々”という名の準詞を設ける必要があるのである」として，「見ル見ルフクレテキマシタ」の例をあげられている[36]。おそらくこの間の事情を語られたものであろうか。

またアラビヤ語はは“4子音動詞”とよばれるものがあるときく。擬声語より生じた重ね型のようであるが，状況描写性の強いものであり，状語，述語用法と密接につながっている[37]。これらは印欧語に見られない文法形式であるため，とかく問題とされなかったわけであろうが，東洋

の多くの言語にみられるこの事実は，漢語に“重なる構造”というものを設定するなにがしかの必然性を語っているように思われる。

3.3：最後にとり残したいくつかの問題をあげておこう。

まず第一に，比況性連合構造とはいえないが，次のものをわれわれが一種の諺と察知できる一端の理由は，主，述の両方に同じ形式の出てくる点を考えねばならないのではなかろうか（もち論他にも理由はあろうが）。

背時人講背時話。　　直人説直話。

つまり「逆境にある人が逆境の話をする」のではない，「逆境にある人は逆境の話をしがちのものである」と解すべきである。なぜ“汎説”に理解しなければならないのか。外部形式としてはどの点を見ればよいのか。われわれにはそれを説明する責があるように思う。

第二に，主，述に分れて同じ形式のあらわれるものには次のようなものが多い。

忙時候総是忙時候，大家听了一会，就回去睡了。

これは「好是好」と同じで，一種の“再確認”を示す（しかしこの逆「好不好」では対対子が生きてくる）[38]。

しかしこの種のものが二つならぶと“それぞれに別物である”という区別を示すことになる。

65. 親是親，財是財。

66. 唱的唱歌，跳的跳舞。

しかしこれらは否定になると，多くは状語になり，あるべき区別を失っている一種の“混乱相”を示す。

67. 風吹雪滾，住的那屋子，門不是門，窓不是窓，凍得渾身発抖。

68. 他火気就上来，鼻子不是鼻子，臉不是臉，也不説什麽。

ある種の“並ぶ構造”がはたらいているといえる。

第三に，口頭語の“あいさつ”ことばに重なるものがきわめて多い。これはどう考えればよいのか。心理的なもののことばへの反映であろうが，重なる形式というものの意味を解くひとつの手がかりを見出せそうなところである。「請多指教指教。哪里哪里。慢待慢待。保重保重」から，さらには「謝謝」にまでつながっている。

第四に，動詞の重なるもの（一般にはもち論重畳としないが）には次のようなものがある。

69. 念着念着，這老頭就睡覚了。

70. 那天晩上，她繃着繃着，繃着的鳥児一下子変成了个胖娃娃。

71. 他等啊等啊也不見少祥来。

これらはつねに間に「着」や動詞を介在させて，動詞そのものの重畳と区別する役割をさせている。これらは動作の反覆といわねばならないであろうが，しかしなおわたしは，“動作”とは異った“様態”を感じないわけにはいかない。本来“動作”と“様態”とはこういうところで相通じているものであろうか。

漢語の重畳形式とはこの種の問題を含めて考え，その上で厳密な位置づけをしなければならないものであろう。その厳密な位置づけはなお今後の課題である。しかし重畳形式，比況性連合構造がもつその状況描写性[39]，その反映としての文法機能に大きな問題のあることを指摘し，本稿の筆を擱くこととする。（1969．1．8）

1) 本稿は昭和43年度文部省科学研究費助成を受けた研究の成果の一部である。昭和43年9月，大阪市立大学中国学研究談話会で，草稿段階の発表をし，貴重な示唆や忠告を与えられた。共に記して感謝の意を表したい。

2) 重畳式について，これまで次のような資料がある。単行の文法書は省略するが，太田辰夫「中国語歴史文法」（江南書院，1957）と王力「中国語法理論」（中華書局）下冊は詳しい。

1. 張其春，蔡文栄「談畳詞的作用」，語文学習 '57，2
2. 季高「名詞和副名詞的畳用」，語文学習 '52，1
3. 季高「用畳字組成的形容詞」，語文学習 '52，2
4. 郭乃岑「人民活語言中的重畳詞」，中国語文 '53，12
5. 蔣蔭柵「談帯重畳輔助成分的形容詞」，語文学習 '58，7
6. 崖秀蓉，徐君徳「哪些形容詞能重畳」，語文学習 '57，9
7. 馬徳貴「談重畳輔助成分的形容詞，語文学習 '57，3
8. 徐仁甫「漢語重畳詞的形式」，中国語文 '54，8
9. 汪恵廸「帯重畳輔助成分的形容詞不能受副詞的修飾麼？」，語文学習，'58，7
10. 范方蓮「試論所謂"動詞重畳"」，中国語文 '64，4
11. 王還「動詞重畳」，中国語文 '63，1
12. 季人鏗「関於動詞重畳」，中国語文 '64，4
13. 于細良「疑問代詞的重畳用法」，中国語文 '64，4
14. 張洵如「国語重畳詞之調査」中国語文研究参考資料選輯（叔重編，中華書局）105頁
15. 牛島徳次「開開は重畳形式か？」，中国語学 '58，1
16. 伝佐之「温州方言的形容詞重畳」，中国語文 '62，3
17. 何融「略論漢語動詞的重畳法」，中山大学報 '62，1

3) 「説説笑笑」などを重畳と見るかどうかにはかなり異説がある。現に注6に見るとおり，朱徳熙はこれを比況性連合結構に入れている。しかし本稿では同じ形式の重ねである以上重畳とみる。また「説説」と「笑笑」を分け，「説」の重畳と「笑」の重畳の集まりであるともいわれる。しかしこのような議論をすれば「千千浄浄」にも同様であって，「千浄」，「説笑」という原詞が存在するかしないという問題に帰する。後に詳述する。

4) 「比況」ということばは，国文法で「比況の助動詞"ごとし"」のように使われるが，これとほぼ同じく考えてよい。

5) 朱徳熙「定語和状語」（漢語知識講話）32頁。

6) 原文ではこの他に「説説笑笑，拉拉扯扯」が加えられている。しかし注3で述べたとおり，本稿ではこれらを重畳形式として扱うため除いた。むしろ本稿の問題とするのがこの点である。

7) 「語言研究」'56，1（創刊号），83頁

8) 構形形式とする見方は次に詳しい。張滌華編著「現代漢語」，高等教育出版社，1958，上冊91頁。構詞形式と構形形式のちがいは，語彙的意味を附加する形式と語法的意味を附加する形式とのちがいで，漢語では後者に属するものはきわめて少い。

9) 詞と詞素を分けて考えねばならないという説。つまり文字が同じく重なるからといって重畳式とすべきでないとする考えである。たとえば，陸宗達，兪敏「現代漢語語法」，群衆書店，1954，上冊72頁など。これは当然の考えであり，また一般的定説である。しかし本稿ではそのレベルを無視して，すべての重畳を通じてそのもたらす意味を抽出することを意図するため，一応考えに入れないこととする。語構成の段階のものは特に「畳音詞」などとよぶ人がある（張世禄）。

10) 「一個人一個人」のようなものを重畳とみるかどうかはかなり異説がある。「語法和語法教学」人民教育出版社，1956，154頁では「能重畳」といいきっているが，胡附「数詞和量詞」（漢語知識講話）では「畳用」ということばで通している。また以下にのべる数詞の重ね型「三三両両」なども一般には重畳式とはみない：「看起来好象是重畳，其実只是両個数詞的重複運用」（同上，胡附）。

11) ここに〔動詞〕という意味は「説，笑，打，閙」などが動詞ということ。「説説笑笑」などを詞としてみるとき，どう考えるべきかはおのずから別の問題である。

12) 形容詞で重畳するのは二音節の場合，語構成が連合式のものに限られる。動賓式，偏正式，主謂式（有効，筆直，性急など）は一般に重畳せず，また重畳してもＸＹＸＹ型となる（血紅血紅）。さらに連合式であっても形状，状態を示す比擬性の形容詞が一般的で，性質など，外見しがたく，直感しがたいものは重畳しない（勇敢，新鮮，朴実など）。一音節形容詞は一般に重畳するといわれるが，なおその意味による。「累」は“つかれる”という意味で「累累」となることはないようである。

動詞では次のようなものが重畳しない。「得，剩，死，活，懂，掉，成，在，有，塌，缺乏，発生，出現，忘記，成為，希望，感到，覚得，以為，出発，允許，看見，听見」など。つまりアスペクトと関係し，瞬間動詞などといわれるものの多くは重畳しない。

名詞では一音節の一部のものに限られる。大部分は重畳しない。その補いをするのが名量詞の重畳である。

名量詞はほとんどが重畳する。しかし二音節の「公里，加侖」などに重畳はない。

13) 前掲注２，資料10によると，これらの動詞重畳の一部を性格の異ったものとして扱っている。他に「叨叨，吵吵，哼哼」などをあげる。

14) 以下にのべる重言を含め，原詞の明らかでないもの，「動詞とも形容詞ともつかないもの」を「状詞」とよぶ人がある。楊伯峻は「表態副詞」ともよんでいる（「文言語法」）。太田辰夫氏は名詞のＸＸＹＹ型をすべて「逐指」として扱われている（通説でもある）。しかしこれは主語の同位語，いわゆる「複述」たとえば「我們家祖祖輩輩都是工人」のようなものについてはよいが例18のようなものでは一方で「生生しい状況描写性」を考えねばならないであろう。

15) 重畳によって詞の資格をえるもの，つまり詞根の重畳は，普通話に限るなら口頭語的親族呼称と「星星，蚰蚰，娃娃」などごくわずかのものである。他の大部分が重言よりの継承である。方言を考慮に入れると西南官話と福州に多いが，福州では第二音節の発音がかわる点で畳音といいがたい面がある（瓶瓶⟶〔ping ming〕）。

16) その自由さはそれぞれの詞によって異る。「依依，諄諄」などは後のことばがきわめて限られるが，「紛紛，滔滔」などは比較的自由であり，ほぼ自由形式といってよい。

17) 清史夢蘭著「畳雅」には4,300余の重言が集められているという。その他鄭奠，麦梅翹編「古漢語語法字資料彙編」（中華書局，1964）245頁に詳しい。

18) これらの起源は一般に擬声語，擬態語に求められるようである。事実現代語の擬声語，擬態語も一種の重畳形式であって，その状況描写性，状語機能ともにここに述べる重畳形式のそれに等しい（頼惟勤「漢語のオノマトペア」言語生活，昭和39年４月号）。

19) 訓読すると「……タリ」とか「……トシテ」と読まれることはその性格を語っている。

20) 「声声口口」は「口口声声」にすべしという誤文訂正例などがある。語文学習 '58，7，33頁。

21) 前掲注２の資料３に見える。

22) 「領導上信任我，不能馬馬虎虎」という文は「ぼんやりしておれない」という意味が強い。しかし「不能馬虎」であれば，なにかある具体的に事態に対して「いいかげんに見すごす」ことはできないととれる。前者は一種の状態である。「馬虎」より「馬馬虎虎」の多いゆえんである。

23) 量詞の重畳は「毎……」を示すとされる。また名詞の重畳も量詞性のものという説がある。しかしこれは「鬼鬼怪怪」などでは必ずしも当らない。

24) 前掲注12参照。また形容詞のＸＹＸＹ型重畳は方言にも多い。伝佐之「温州方言的形容詞重畳」中国語文'62，3，130頁。

25) 「的」のつくことは興味のあるところである。「花紅紅」で成立せず，「花紅紅的」になることと等しい。

26) これらは人の外貌などを紹介するときの型であるという説がある。また胡附，文鍊は名詞謂語句の一種として次のような説明を与えている。

「還有少数名詞謂句，主語与表語之間一般也不用"是"，表語総是名詞性仂語，不単独用一個名詞。這類句子的謂語対主語起着描写的作用」(「現代漢語語法探索」111頁)。これらの描写性はすでに注意されているところである。

27) 前掲注５と同じ

28) 平仄が関係するものもある。郭紹虞「諺語的研究」(語文通論続編)。「中国諺語論」朱介凡。

29) 「不……不……」の定型で，「不男不女」などは品詞論争で問題になったものである。しかしこれは比況性連合構造の定型に反義詞を入れ作られたものにすぎず，反義詞，類義詞なら詞性を問わず入るところであることを理解しなければならない。「不僧不道」などのように。また「一……一……」の型で「跟你一模一様」などは量詞の一種という考えがある。たしかに「没離開自己一寸一歩」と「走得一歪一倒」の中間的存在であるが，量詞に準ずるものに限られるというわけではない。「……這，……那」の型はそのひろがりが大きく，比況性連合構造と規定しにくいものが多い。「毎天従這個妃子的房間走到那個妃子的花園」など。しかし「他話最多，説説這個，説説那個，妹妹只笑着看着他」などはなお比況性連合構造というべきであろう。

30) 呂叔湘，朱徳熙「語法修辞講話」第二冊。また朱剣芒「成語的基本形式及其組織規律的特点」(中国語文，'55，2)

31) 張世禄は成語の表現力の強さを次の二点に見ている。1. 定型性 2. 習用性，つまり口調のよいことと人口に膾炙しているということであろうか(「怎様運用成語」語文学習'59，3)。

32) もち論成語に述語用法はあるわけで，それを否定するものではない。張世禄「怎様運用成語」(語文学習，'59，3)。黄再春「成語做謂語的句法功能」(中国語文，'58，10)。趙生明「成語性謂語新例」(中国語文，'59，4)などに詳しい。

33) たとえば張璞一「修辞概要」(中国青年出版社) 91頁など。「好吃懶做」などをあげている。

34) 活用型の問題として扱われているが，玉村文郎「"なくなく"と"なきなき"」に詳しい。

35) 「樹樹，人人」といったものもあるが，漢語の影響であり，すでにのべたとおり起源を異にする。

36) 三上章「現代語法序説」(刀江書院) 32頁および索引の４頁。またある雑誌に「……は正に"妖怪"だ。擱筆擱筆」とあった。最後の部分はどう理解すればよいのか。

37) 「sal sala」「鎖のようにつながる」。「zal zala」「ザラザラ地震などで揺れる」。この種のものをいう由である。

38) この否定は「好不好」で一般に肯定否定の疑問になる。しかしまた「美不美故郷水，親不親故郷人」のように「……であろうがなかろうが」という意味を生ずる。これは「不論」などを含むか，並ぶ構造になっていることが条件のようである。「好不好，我的書」は「いいにしても悪いにしても私の本だ」という意味にはまずとられないであろう。上の例が成立するのは対対子になっているからである。

39) 重畳形式，比況性連合構造が状況描写的であることは，しばしばはじめて登場する人物や，新しい場

面の紹介に利用される点からもうかがわれる。

游人中有一双一対的，有携老抱幼的，還有成班的学生或群結隊的工友。

這時軽軽進来了一个瘸子，薄薄的嘴唇，尖尖的鼻子，眼光鋭利，永遠擺出一副喜迷迷的笑瞼。

また次の例は揚州の女性の美しさをいう諺だという：

白灼灼，水汪汪，嬌滴滴，懶洋洋。

重畳形容詞を並べただけでほうふつとさせるものがある。